江戸上水ものがたり

玉川兄弟

杉本苑子

文春文庫

文春文庫

玉川兄弟（たまがわきょうだい） 江戸上水（えどじょうすい）ものがたり

定価はカバーに表示してあります

1994年12月10日　第1刷

著　者　杉本苑子（すぎもとそのこ）

発行者　堤　　堯

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan

ISBN4-16-722420-8

文春文庫

玉川兄弟

江戸上水ものがたり

杉本苑子

文藝春秋

目

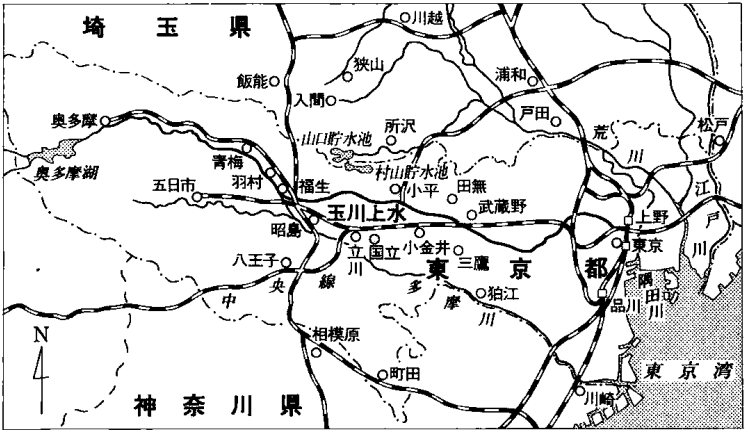
次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertor

秋の水 9
奇妙なさむらい 53
お供せよせよ 94
悲しみ坂 139
ふくろうの森 188
開眼 229
花あざみ 269

断層 309
梅雨なまず 358
魔界の壁 399
ぶどう棚 439
羽村鮎唄 480
冬晴れ 530
あとがき 585
解説 清原康正 589

玉川兄弟


埼玉県
川越
狭山
飯能
入間
浦和
奥多摩
所沢
戸田
荒川
松戸
山口貯水池
青梅
奥多摩湖
村山貯水池
五日市
羽村
福生
小平
田無
江戸川
武蔵野
玉川上水
上野
昭島
東京
立川
国立
小金井
八王子
三鷹
東京都
中央線
多摩川
狛江
隅田川
品川
N
相模原
町田
東京湾
川崎
神奈川県

秋の水

1

日が落ちきると、気温は急にさがった。陰暦、九月十五日――。あと半月ほどで木枯しの吹きたけぶ冬にはいる。

いや、冬だけとはかぎらない。ほとんど一年中、江戸の町すじを揉み立てて通る関東名物のからっ風は、今日も辻々の砂礫を巻きあげ、時おりそれを、つかんで投げるかと思う強さで頬先に叩きつけてきたが、枡屋庄右衛門は痛さも寒さも、いっこうに苦労にならなかった。男ざかり、働きざかりの三十一歳……。降ってわいた大仕事の内達に、全身の血が熱くほてって、酒の、ほのかな酔いにも似たこころよい昂りを、四肢の先端にまで充足させているのだ。

「この工事、ものにしたい。なんとしてでも枡屋で一手に引き受けたい」

と、思う。

「内談したい一儀がある。即刻、出頭せよ」

そう、使者の口上で伝えられ、とるものもとりあえず雉子橋御門内の、老中・松平伊豆守邸へ出かけて行ったのが、二刻ほど前である。

そしてそこで、小畑助左衛門と名乗る勝手方家老から、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「まだ公表の段階には至っておらぬゆえ、くれぐれも内密にな」
釘をさされた上で打ちあけられたのが、
『上水道を設置して多摩川の水を江戸市中に引きこみ、町民の飲料用に配水する』
という工事の内容だった。
「多摩川の水を!?」
「うむ。多摩川の水を、だ」
小畑家老のこの、うなずきが、枡屋庄右衛門を軽い酩酊状態におとしいれてしまったといえる。莫大な公費の計上が見込まれているにちがいないし、工事そのものの規模からして、これまで枡屋が扱ってきた寺社や武家屋敷の石垣の突き立て、堀の底さらえ、町内普請の新道の石敷きといったちっぽけな仕事とは桁がちがう。一生に一度、あるかないかの、ドカ儲けの好機だ。
「成功させたあかつき、枡屋の格と重みは、同業を圧するものになろう」
その思惑もむろん、魅力だが、何より庄右衛門を捉えたのは、小畑の口から出た『多摩川の水』の五文字であった。
彼は、武州羽村の生まれなのだ。今も生家の加藤家は、羽村在で大百姓のうちにかぞえられ、長兄の八郎右衛門が間坂の本家をついでいる。江戸へ出てくる十六歳まで、村の崖下を削って流れる多摩の清流に、いわば育てられたにひとしい庄右衛門なのである。
「ひとにはこの仕事、渡せないぞ」
と、だからこそ、いっそう心に期すものがある。
老中がその私邸へ、土木業者をじかに呼びつけ、自藩の老職を通じて公儀ご普請の輪郭を内

示するなど、形式からすれば筋がちがう。
「密々に……」
と幾度も念を押したところをみると、計画には伊豆守信綱が、大きく一枚、噛んでい、おそらく内示を受けた業者も、枡屋一軒ではないはずと見てよい。下命ではなく、あくまでまだ、内達にすぎないのだ。
「およその工事仕様帳、絵図面、資材購入、人足集めの見通しなどに予算の見積り書を添えて、向うひと月以内に提出するように……。それによって、かさねての達しがあろうが、ご公儀の腹づもりでは普請のお取りかかりは、だいたい明春早々ということらしいな」
小畑助左衛門のこの言葉は、二つの方法を暗示していた。最終的に、業者間の落札で請負いをきめるか、あるいは費用の見積りと工法をつき合せ、もっとも手がたく、もっとも格安に値をつけた者に請負わせるかの、どちらかであろう。
「千両は儲けたい大仕事だ」
——が、また、欲をかきすぎて他の業者に奪われては虻蜂とらずになる。
「そこの、かね合いがむずかしいな」
さっそくにも手を回して、幕閣要路のおよその見積り額を、さぐり出す必要があろうけれども、
「さて、手づるは……？」
となると、庄右衛門は途方にくれる。なんといってもまだ、若い。店の格付けも、業界では中堅に位置する。役所関係への縁故は、どの筋をたぐったところで強力とは言いがたい。ただ、

仕事師としての庄右衛門の技倆は、

「ずばぬけている」

と、仲間うちでは折り紙つきだった。年のわりには老成している。包容力のある重厚、穏和な気質も、手足になって働く使用人どもの、信頼の要になっていた。

それと、いま一つ。……割元を引きうけている弟・清右衛門の、人足集めの手腕に、ほかの業者には見られない冴えがある。

土木仕事のなかばは、腕っこきで命知らずで、割元との義理、人情のきずなにふだんから、かたく結ばれている人足集団の質のよしあしできまるのだし、

「しかも相手が多摩川なら……」

その水ぐせ、流域の様相、取り入れ口の選定まで、『母なる川』同様に愛している自分の、右に出る知識はないはずだとも、庄右衛門はひそかに自負する。

「巴屋の弥兵衛さん、浜川のご隠居……」

知人の名が幾つか、不意に記憶の底に明滅した。巴屋は田町の紺屋。浜川は湯島の天神下に店をかまえる上菓子司だが、二軒ながら当主と、先代の老人が、水のために命を落としている。

江戸の、井戸水の悪さ、世帯の増え方にくらべてその量の足りなさは、年を追うごとにひどくなってきていた。大河がすくなく、標高が低い。海浜に近い下町など、掘ってもじくじく滲み出すのは、とうてい飲むに耐えない塩水か、雑水にしか使えない金けの強い悪水ばかりだし、川も満潮のたびに海水がさして、五里六里もさかのぼらなければ真水が汲めないありさまなのである。

庄右衛門の住む芝一帯は、赤坂溜池の水の供給を受けて、さほど日常に不便を感じていないが、それでも日照りがつづいて池の水位がさがったり、底が一部、干あがったりしようものなら、すぐさま節水、断水の指令に悩まされ、時には騒動にすら発展しかけた。

「となり町のやつらは水番に袖の下をつかませて、水分け枡の差蓋を二寸もあけさせたそうだぞ」

「そいつはけしからぬ。皆止めのお達しさいちゅうじゃないか」

「依怙ひいきだ。訴えて出ろ」

そんなごたごたは、あとを断たないし、ましてまだ、神田上水、溜池からの分水など上水道の配分をまったく受けていない神田、下谷、浅草へん、あるいは青山、牛込、四谷、麹町近辺の町民の困りようは言語に絶していた。

たまに、良い水の出る井戸があると、その家まで十丁二十丁の遠道もいとわず、毎日毎日手桶をさげ、甕を担いでもらい水にかよう。そのつらさ、大儀さ……。井戸の持ちぬしがあこぎだと、附け届けをしなければ嫌な顔をするが、紺屋はことに、多量に清水を使う商売だ。巴屋の主人は井戸の持ちぬしの、あまりといえば強欲な、たびかさなる礼金の釣りあげに、つい腹をすえかねて言い争いとなり、相手につかみかかったのがもとで召し捕られ、吟味中に牢死してしまったし、菓子司の浜川の場合もさいなことから、井戸の持ちぬしと喧嘩して商売用の水の手を断たれた結果、倒産。一家心中にまで追いこまれかけたのを、隠居ひとりが首をくくって詫びて、かろうじて和解に漕ぎつけている。

でもまだ、もらえる水がある町はいい。その当てすらないところでは、一荷いくらと銭を払

って、水売りから飲み水を買わなければならない。貧しいくらしの中では、どうしても節約して不潔がちになる。五人の子供のうち四人までを、悪性の腹くだしで死なせた夫婦、炎天下、水もらいに往復する重労働がこたえたか、路上で心臓発作を起こして急死した老僕、汲み置き水を盗み飲みされたのにカッとして、通りすがりの順礼をなぐり殺し、獄門にかけられた職人の話など、

「せめてゆたかに良水さえあったら……」

回避されたであろう悲劇が、茶飯事に語り交されもする昨今の江戸である。

「あの、清らかな多摩川の水！」

ぞんぶんに、その恵みを受けられることで、どれだけ多くの人が蘇生のよろこびを味わうか知れないと思うと、儲けへの弾み、功名への野心にまして、庄右衛門の若い血は、彼らの歓喜と歓喜を一つにして熱く、たぎってくる。とくとくと音たててこころよく搏(う)ってくる。それだけになおいっそう、

「ぜひともこの工事、手に入れたい。入れずにはおかぬ」

と気負って歩くひと足ひと足が、晩秋の暮れ方の、寒さも風もをはじきとばして、走りでもするように早くなるのだ。

店は日比屋町一丁目にあった。新橋の南の橋詰めに寄って、間口(まぐち)二十間(けん)――。大店(おおだな)の多いこのあたりでも、目に立つくらい構えはがっしりしていた。

大戸はもう、おりているが、主人の帰りを待ってくぐりの桟ははずしてある。掛けあんどんのともる土間のうす暗がりの中に、庄右衛門はふみ込みながら、

「もどったよ」
奥へ向かって大声をあげた。

2

「あ、旦那さま、お帰りなさいませ」
「あなた、お帰りなさい」
番頭の吉平が帳場から、中廊下ののれんの蔭から妻の佳寿が、ほとんど同時にとび出して迎えた。
庄右衛門と九ツちがいの佳寿は、ことしやっと二十二……。それなのにもう、二人の子持ちである。いまも片手に、ついこの春、生んだばかりのお富を抱き、ほっそり伸びた腰の線によちよち歩きの長男・三十郎をまつわり附かせて出てきた。
いっぽうの手に持つぼんぼりの、ほの明りに、白い笑顔が、夕顔の花さながら浮いて見える。ようよう女の熟れにさしかかったか、人の妻、子らの母の落ちつきとは別に、おさえようのないなまめきが、なにげない挙措にさえ噴きこぼれる若女房ぶりだ。
「お寒かったでしょう。今日もまた、えらい風になって……」
「口の中までじゃりじゃりするなあ」
「おすすぎなさいまし。洗足のお湯もわいています。すぐ、お取りしましょう」
土間におりかけるのを、
「いや、また出かけなければならない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton